

高次脳機能障害者とその家族の ピアサポートによる自己と関係の 変容に関する発達的研究

研究代表者 脇 中 洋

A Research about the Brain Injury and their
family's Changes of Self and their Social Relation-
ships based on Developmental Psychology.

by Wakinaka Hiroshi

【研究成果の概要】本研究では、NPO 法人と連携しながら高次脳機能障害者ピアサポーターを養成し、概ね週1回以上の高次脳機能障害ピアサポート活動を継続して記録を収集し、社会的実装を果たした。また生活施設や就労支援施設の現場職員と当事者やその家族を交えた事例報告研究会を3か月おきに開催した。さらにこれまで連携してきたカナダのピアサポーター専門家との情報交換や共同の学会発表を行い、高次脳機能障害ピアサポートの有用性を実証した。

【Abstract】 In this research, we have trained Brain Injury Peer supporters at a NPO in Osaka, have kept activities on many kinds of peer support programs more than once a week, collected a lot of case reports, and then we have realized sustainable social activities. We have held a study group working on the case with Brain Injuries, their families and social workers every three months. And we have exchange some informations about Brain Injury Peer support with an expert of Brain Injury peer support in CANADA each other, so we have announced the result of Brain Injury Peer Support as a presenter at the conference.

キーワード：高次脳機能障害、ピアサポート、自己適応、障害受容、関係の変容、包括的支援

1. 研究開始当初の背景

脳損傷の結果引き起こされる高次脳機能障害は、病院でのリハビリを終えて以降も人格変容や病識の欠如によって家族との葛藤が絶えず、就労を果たしても対人関係につまずくことで問題行動を引き起こしたり無気力に陥ったりするなど、社会適応に困難を抱えている。この障害は人格変容をきたすため、新たな自己に気づき認めることが回復につながるとされながら、医療的リハビリテーションの場ではそれが果たせていないことを示している。

これに対して我々は、ピアサポートが自己を再構築する社会的な場として機能することに着目し、2005年度からの萌芽研究(課題番号17653076)では、先進的に取り組んでいるカナダの当事者団体と連携しながら国内で初めて高次脳機能障害者向けの体系的ピアサポーター養成プログラムを作成し、実際の当事者ピアサポーター6人と家族ピアサポーター10人を養成した。その後彼らとともにプログラムの修正を図るためピアサポート委員会を結成し、カナダの当事者団体とも連携を深めながら実践の準備を進めてきた。

2. 研究の目的

高次脳機能障害者とその家族に特化したピアサポート実践を通じて、症候学的観点ではなく関係発達論的観点から、高次脳機能障害者の回復過程(主体性を引き出すことによる症状の変容過程)を検証することによって、当事者の自己変容や家族関係の変容をモデル化して高次脳機能障害者の新しい回復理論の構築をめざし、医療や福祉行政に対して新たな発達の回復モデルの提供を図ろうとするものである。

3. 研究の方法

(1) 萌芽研究からの継続的实践研究

①研究協力者の一人は、カナダで高次脳機能障害のピアサポートを2002年から取り入れ、ピアサポート・プログラムの運営を担う Victoria Brain Injury Society (VBIS) の当事者スタッフである。VBIS を拠点としたカナダの調査を継続

する一方で、日本で2006年から参与観察を開始したピアサポーター養成プログラムの参加者を支援しながら事例として記録に残し、日加双方で情報を共有してきた。

②萌芽研究で14セッションからなるピアサポーター養成プログラムを作り、ピアサポーターを2期にわたって養成したことを受けて、第3期のピアサポーター養成を行ない、プログラムの検証を行った。

③研究会組織を立ち上げ、ピアサポートフォーラムを開催した。

(2) 新たな発展的研究

① NPO 法人大阪脳損傷者サポートセンターを拠点としてピアサポート実践を継続させて社会的実装を図った。またその事例記録を収集するとともに、ピアサポーター養成に関するノウハウを蓄積し、錬成された養成システムを構築した。

②高次脳機能障害者の新たな回復観の構築を目指して、当事者やその家族が自己を肯定的に受容するプロセスにはたらく要因を検討し、関係発達論的な回復理論の確立を目指した。

4. 研究成果

(1) ピアサポート実践活動の社会的実装

NPO 法人大阪脳損傷者サポートセンターと連携しながら概ね週1回以上のピアサポート実践と月例ピアサポーター委員会を実施して記録に残し、自己と関係の変容を示す事例の収集に努めた。ピアサポート実践活動は、新たに養成したピアサポーターが中心となって、NPO 大阪脳損傷者サポートセンターの定期的活動として定着し、その中から当事者の自主的クラブ活動へと発展した。具体的な活動としては以下のものがあげられる。

①ピアサポ・ディ

週1回のペースでピアサポーターが当事者の相談に乗るだけでなく、残存能力に応じて「活動をともしする」ことを試みた。習字や陶芸、ステンドグラス作成、手芸、音楽活動、絵画制作など。

②ランチの会

月1回のペースで当事者自らメニューを決め、集金し、買い出しを行うラン

チの会を開催し、定例化した。病院でのリハビリ時から退院後も自発的活動経験に乏しかった当事者が、主体的に活動することで、本人の特性を把握し、後の現実的活動プログラムへとつながっていった。

③スポーツクラブおよび体育活動

養成されたピアサポーターが自主的クラブとして当事者同士に呼びかけ、長居障害者スポーツセンターでの活動を週2回のペースで行った。ここに参加した数名は、その後障害者スポーツ大会に積極的に参加するなどした後、就労へとつながっていった。またスポーツインストラクターを招へいして、当事者向けのメニューを作ってもらい、神戸しあわせの村での体育活動も企画した。

④ピアサポ in 大谷大学

月1回のペースで定例のピアサポーター会議を午前中に開き、ピアサポーター同士で当事者に関する情報を交換して、対応を検討し合った。また午後からはピアサポート活動を行って、新たな活動の可能性を探った。

⑤ピアサポ田んぼ

滋賀県高島市の2アールほどの田んぼを借り上げて、当事者の活動の可能性を拡げる目的で、田植え、草引き、稲刈りの活動を行った。農作業を通じて当事者の特性がしばしば明らかになり、ある当事者は栽培企業への就労を果たした。また収穫された無農薬米は、②のランチの会で活用した。

⑥学生ボランティアを募集しての合宿

大阪府立大学作業療法士科の学生ボランティアを動員して当事者とその家族の合宿を催し、毎年秋の定例合宿に向けて、学生らと共に実行委員会を立ち上げた。合宿後には、当事者と家族、ボランティアとの間で情報交換をする形態も定着した。

(2) ピアサポーター養成とプログラム練成

ピアサポート実践に欠かせない第III期ピアサポーターの養成は、2010年7月～11月にほぼ週1回14セッションを費やした。このうち1回のセッションではカナダのピアサポート専門家を招へいして、ピアサポートのあり方についてロールプレイを用いながらトレーニングを実施した。プログラム最終回にはピアサポーター養成修了のイベントを行った。

これらの活動により、A. 当事者がNPO法人を相談に訪れてピアサポート

を受け、B. その後ピアサポーターとして訓練を受けた後に、C. ピアサポーターとして1～2年間活動を担い、これまで困難だった社会的役割を得て自信を深め、D. さらに就労支援を受けて就労を果たしながら地域での生活へと定着していくという社会的な回復への流れがほぼ出来上がった。

これまでに計4期にわたってピアサポーターを養成したが、そのノウハウを活かして高次脳機能障害に特化したピアサポーター養成プログラムの内容をさらに練成した。

(3) 現場専門家を対象とした研究会の開催とまとめ

当事者およびその家族が、生活施設や就労支援施設、ハローワークといった高次脳機能障害者と向き合う現場専門家とともに事例検討する研究会（高次脳機能障がい地域生活サポート研究会）を開催して大阪近辺の地域との連携を深め、その内容を報告集にまとめた。

この研究会は3か月おきにこれまでに15回開催され、年に1回フォーラムを開催する形態で定着した。

(4) カナダのピアサポーター専門家と学術交流と学会発表

これまで交流を進めてきたVBIS (Victoria Brain Injury Society) へは2009年9月と2012年2月に訪問し、スタッフと事例情報を交換した。また2010年9月にはピアサポート専門家である Alex Gilchrist 氏を日本に招へいして情報交換し、カナダと日本における家族関係の違いと支援の在り方について考察を深めたほか、沖縄県の学校におけるピアサポート活動を共に参観するなどして連携を深め、京都発達研究会および沖縄発達研究会での事例報告に至った。

さらに2012年2月には、カナダ・バンクーバーでの当事者学会において共同して学会参加と発表をした。ここで交流したヴィクトリア大学の教員や地域支援の専門家らと今後も学術交流を進め、共著で文献出版の計画を進めた。

(5) 高次脳機能障害者の新たな回復理論に向けて

当事者たちがピアサポーター養成からピアサポート実践の過程において著しい回復を見せた要因として、①ピアサポートという役割を得て他者から必要とされ、新しい自己を承認できること。②サポートを受ける側には同障者が様々

な生き方を目の当たりにできて、抑圧的ではない役割モデルとして機能すること。③閉じた個体機能の改善ではなく対等な関係の中で持てる力の発現に着目することによって、当事者の自発性が引き出されることがわかってきた。

また我々は、人格の変わってしまった当事者の身近にいてそれを受け入れざるを得ない立場にある家族を含んだ実践活動を重ねる中で、当事者は「家族や他者との関係の中でこそ新たな機能を形成していく」という関係発達論的観点が欠かせないこともわかってきた。

翻って医療の場では要素還元的に症状を捉えており、これはピアサポート実践から仮説的モデルとして提示できる回復の機序とは異なるものである。彼らの回復の機序とは、「対象化され、閉じられた個体機能の修復」ではなく、「関係の場における主体的な自己の再構築」というすぐれて関係発達論的問題であることが明らかとなった。

その一方で、一部の当事者にはピアサポート活動になじみにくいケースも見られた。共通する要因は、家族や社会に対してやや過剰適応的であり、自己の欲求を他者に対して率直に開示することに抵抗があるためと思われる。

こうして高次脳機能障害者に特化したピアサポート活動は、継続的な実践活動としての社会的実装を果たすことができたが、そこにおいて14セッションからなるピアサポーター養成の果たす役割もまた大きいと思われる。ピアサポーター養成では、当事者の自殺念慮への対応等の危機的状況への対処や、当事者に対する受容的態度の維持、社会的資源の学習など、社会生活を送る上でも、当事者にとって有用な訓練となっており、ピアサポーターとして活動した後に就労を果たした当事者も20名近くにおよんでいる。

また、ピアサポート活動は単なる相談に終始せず、当事者の特性に合わせた活動を次々と編み出していき、そのことが当事者たちのピアサポート活動定着に結び付いて行ったと思われる。

以上、高次脳機能障害ピアサポート活動は、NPO 法人における継続的事業となり、また養成してきたピアサポーターの多くはその後就労するなどして社会的適応を果たし、また開催した研究会を通じて地域支援の専門家との連携を確立させて、当初の計画以上に社会的実装を十分に果たせた。

さらに研究の過程で、カナダでは触法脳損傷者が多いことから、法務官や矯正施設内の当事者を調査するに至り、高次脳機能障害者に特化したピアサポー

トから、触法知的障害者の地域定着支援に対しても、ピアサポートの有効性を検証して社会的実装を目指す方向へと向かいつつある。

そこで新たに社会福祉領域で2012年度からの科研費助成（基盤研究（C）「触法知的障害者の更生と地域生活支援を促進するピアサポートプログラムの開発と評価」課題番号24530750）を受けて、さらに領域を拡げた研究に取り組むこととなった。

〔文献〕

- 脇中 洋編著（2010）高次脳機能障がい者地域生活サポート研究会2009年度報告集 46
P
脇中 洋，中塚圭子（2009）ピアサポート・デイを立ち上げて 頭部外傷や病気による
後遺症を持つ若者と家族の会 NEWS29. Pp. 16-21.
中塚圭子，脇中 洋（2009）ピアサポート in 京都からのご報告 頭部外傷や病気による
後遺症を持つ若者と家族の会 NEWS28. Pp. 14-19.

〔学会・研究会〕

- 脇中 洋（2012年3月20日）「生きる場での回復をめざして 現在の自分を生きる 他
者と共に生きる」第13回高次脳機能障害地域生活サポート研究会フォーラム 大阪
府立大学・中之島サテライト
脇中 洋，Alex Gilchrist，中塚圭子（2012年2月16日）‘Brain Injury Peer Support
in Japan.’ 22nd Pacific Coast Brain Injury Conference. Vancouver, BC, CANADA
脇中 洋（2010年7月20日）第6回高次脳機能障害地域生活サポート研究会フォーラム
開催 大阪府立大学・中之島サテライト

〔研究協力者〕

- 中塚圭子 洛陽病院・言語聴覚士
Alex Gilchrist Victoria Brain Injury Society・Case Manager
石橋佳世子 NPO 法人大阪脳損傷者サポートセンター・事務局

本研究は、日本学術振興会・基盤研究（C）課題番号21530708による助成を受けたものである。